

日本人とスポーツの関係について ～国際大会への関心の高さはどこからくるのか～

A study of relationship between Japanese and Sports ~Why are Japanese absorbed in international match~

1K04B239-0

山中 真帆

指導教員

主査 宮内孝知先生

副査 太田章先生

動機・目的

日本では5年ほど前から、日本語ブームをはじめとし、サムライ映画のヒットや古武術の人気など『ニッポン』がとても注目されている。これら『ニッポン』ブームの1つとして、日韓共催のW杯やWBC優勝、世界水泳・世界陸上などといったスポーツの世界大会への注目・応援がある。しかし、プロ野球やJリーグなど、国内のスポーツに対する日本国民の関心は低調なままであり、テレビで中継・報道されないスポーツに至ってはほとんど関心が無い。そこで、なぜ日本人はスポーツで国際大会にしか大きな関心を抱かないのかという課題を設定した。

日本人の国民性、日本におけるスポーツの歴史、またスポーツとは切っても切り離せないナショナリズムについて文献を中心に調べ、それらの調査結果を踏まえて課題について考察を行った。

第1章 日本人の基本的性格

日本人論として有名な『菊と刀』(ベネディクト)において、日本人は「しかしまた」を多用しなければ語り得ない矛盾した国民であるとされている。

また古代の日本社会において、生活の中心にあった農作業は相互協力作業を必要とし、その関係の中から〈他者志向的〉な行動パターンができた。この〈他者志向〉が持つ恥と共感の文化の中から「義理と人情」を重んじる風習が生まれ、定着した。しかしそこには「甘え」を氾濫させるベースがあり、対人恐怖症など日本人特有の病理を引き起こしている。

もう1つ、日本人をあらゆる特徴として〈自己否定性〉が挙げられる。異質な外国文化の理解や摂取のとき、自らを白紙の状態においてそれを遂行する「白紙的立場」を日本文化は常に保っている。この基礎にある、日本独自の「察し」と「思いやり」に見られる言葉の否定、また相互理解のためには論理的な言葉は必要ではないという気持ちこそ、日本人が生まれつき持つ純粋な日本的考えなのである。

第2章 日本人とスポーツ

近代スポーツが導入される以前に日本で行われていた運動文化は、競技の場に政治意識を色濃く残し、そのために徹底的に勝敗を争うようなことはせず、また勝負の場より稽古における精神鍛錬を重要視した

ものであった。

明治時代になって近代スポーツが導入されたが、“富国強兵”“殖産興業”の目的のもと発展していったため、本来の楽しむという要素がなくなり、精神修練の手段として定着してしまった。そのおかげで猛練習に励むことにより、一部の種目では日本のスポーツレベルは短期間で世界と戦えるようにまでなった。戦争により一時期世界の舞台から遠ざかることもあった。しかし、戦後の行政による環境整備、民間の活力そして科学的な研究の成果に裏付けられ著しい発展を遂げていった。

第3章 日本人とナショナリズム

ナショナリズムとは「あるネーションの統一、独立、発展を志向し推し進めるイデオロギー」(丸山真男)である。

明治時代、政府は一独立国家として西欧の列強にいち早く追いつけ追い越すために“富国強兵”“殖産興業”政策を推し進めていった。しかしこの政策をもとに成立した日本の資本主義は労働者の過酷な労働をベースとしていたため、国内市場の脆弱さを他民族の支配に転嫁することによって打開しようとし、帝国主義に走っていった。

戦後、そのような偏狭なナショナリズムに対する反省や批判が多様な形で行われ、日本と日本人のあるべき姿を求めて、今も議論が行われている。

第4章 まとめ

戦後60年経った現在においても、日本はまだ戦争の反省が活かしきれず、日本のあるべき姿を確立できていない。更にバブル崩壊、オウム事件、阪神・淡路大震災、という流れから、経済が落ち込み、治安が悪化するなど日本のマイナス面が浮き彫りとなった。そのためか、現代の日本人のアイデンティティの希薄さが広がっていったと考察する。しかしスポーツなどでみんなが盛り上がりれば感覚がマヒして一体感が得やすくなる。また、同じ日本人が世界を舞台に頑張っているところを見て応援することで、日本人としての自信と誇りを与えられアイデンティティの確認ができたような気分になる。そういった深層心理が、スポーツの国際大会への関心に向けさせているのだ。